

スワヒリ地域のイスラーム社会におけるアラブ

平成18年入学
派遣先国：ケニア，タンザニア
朝田 郁

キーワード：スワヒリ地域，アラブ，ハドラミー，移民，サイド

対象とする問題の概要

インド洋に面した諸地域は、交易活動を通して相互に人や物のネットワークを構成してきた。この海域世界の一角を占める東アフリカ沿岸部のスワヒリ地域は、歴史的にアラビア半島との結び付きが深かったことから、オマーンやイエメン出身のアラブ人の主要な移住先となってきた。特に19世紀以降には、イスラーム法学者や神秘主義教団の指導者たちが、このネットワークを利用してスワヒリ地域に移住し、現地イスラーム社会で大きな役割を果たしてきた。しかし、タンザニア島嶼部に位置するザンジバルで1964年に起こった革命で、これまで特権的な地位を占めていたアラブがアフリカ系住民によって大量に殺害、また沿岸部の他の都市へ追放されるなどした。その結果、スワヒリ地域におけるアラブのプレゼンスが低下する一方、アフリカ系住民から宗教知識人の役割を担う者が現れるなど、非アラブ地域におけるイスラーム社会固有の問題や現象が可視化しつつある。

研究目的

東アフリカ沿岸部のスワヒリ地域において、アラブはマイノリティーである。しかし、移民として海を渡ってきた彼らが、政治・経済・宗教・言語など、この地域における人々の生活様式や物質的・精神的活動に及ぼしてきた影響は計り知れない。本研究は、これらのアラブ系住民の中でも、現在のイエメン東部地域、ハドラマウト出身のアラブ移民であるハドラミーに注目し、彼らが地域を越えて持つ広域ネットワークと、現地イスラーム社会で果たしている社会的機能の提示を目的とする。

国家運営や農場経営など世俗的問題に関わっていたオマーン系住人とは異なり、ハドラミーたちは祝祭・イスラーム教育・神秘主義など宗教実践の領域を中心に活動してきた。また彼らは、インド・東南アジアなどインド洋世界各地に移住しており、相互に密接なつながりを有している。本研究ではこのネットワークをふまえながら、地域のイスラーム実践をマクロな視点からとらえていきたい。

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークは予備的な位置づけで実施期間も約1ヶ月と短かったが、調査の目的として研究テーマの明確化とフィールドの選定を設定しており、次に述べるような一定の成果が得られた。

現地ではまず、職業や家系を限定せずに様々なハドラミー移民にインタビューを行った。その中には路上で食料品などを販売して日銭を稼ぐ者から、イスラーム諸学を修めた学者や神秘主義教団のリーダーのような宗教知識人にいたるまで、広範な社会的地位に属するハドラミーが含まれている。また調査に際しては、特定の国や地域だけには留まらずに、ケニアのラム島、マリンディおよび近隣

の村であるゴンゴニー、モンバサ、そしてタンザニアのザンジバルを構成するウングジャ島とペンバ島といった、東アフリカのスワヒリ地域各地に点在している複数のイスラーム都市を訪問した。

図1 ゴンゴニーにあるイスラーム学院の学者たち。



今回の予備調査で分かったのは、ハドラーミー移民の中でもサイド（預言者ムハンマドの子孫）の一族と他の諸部族の出身者では、保有している資料や情報の質と量が大きく異なるということである。諸部族の出身者たちは、アラブとしてのアイデンティティを誇るよりも、アフリカ系の住民と同化する道を選んでいるケースが多く見られた。移民の初期世代についての記憶はすでに失われており、地域のイスラーム実践への関わり方においても、一般のムスリムと変わるところがなかった。

図2 ラム島のリヤード・モスク。



一方サイドたちは、自らの家系や血統の保存に大きな関心を持っており、その努力の結果は7世紀のアラビア半島に暮らした、預言者ムハンマドまでさかのぼる家系図の形で見ることができる。またサイドたちは、イスラーム実践の観点からも重要な役割を果たしており、特に近年の政治的動乱の影響から衰退したと考えられていた、東アフリカ最古の神秘主義教団であるアラウィー教団において、彼らが現在でも中核を担うメンバーとして活動しているという新たな発見もあった。

図3 ハドラミー・サイドの家系図.



今後の展開・反省点

予備調査の結果をふまえて、2007年春期の本調査および同年度内に提出予定の博士予備論文では、ハドラミー・サイドの役割、アラウィー教団の位置付け、ムスリムたちのネットワークの3点を軸に研究を進めていきたい。またフィールドワークの対象地域は、現在でも多数のハドラミーが暮らしていることが確認できたタンザニアのザンジバルとする。ザンジバルにはアラウィー教団の拠点が複数存在することに加え、近年ハドラミー協会が設立されたことから調査にふさわしいと考えられる。

本研究は移民を対象にしてはいるが、従来の移民研究で取り上げられた労働者、難民、奴隷などのテーマからは離れて、イスラーム研究の関心から問題の設定をおこなっており、その点での独自性もあると考えられる。今後は予備調査では十分にフォローできなかったネットワークについても検討し、スワヒリ地域におけるハドラミー移民の社会的機能の総合的な理解に努めたい。